



TITLE:

臺灣の日蝕より歸りて

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 臺灣の日蝕より歸りて. 天界 1941, 21(245): 339-339

ISSUE DATE:

1941-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168279>

RIGHT:

乙 “ナンノ、ナンノ、新工夫の殺人法さ、始終そんな事を詮索してるのだぜ”

甲 “フン、いかなア、ちや如何だらう、一つ教へて遣つては！ 古い記録に澤山有るが”

乙 “面白い………だが止めだ！ マアやらして置くさ、あれで如何にか漕ぎ着けるだらうよ”
〔古いデイリー・ヘラルド紙より〕 杉香譯

臺灣の日蝕より歸りて

豫定計畫により、去九月21日の皆既日蝕を觀測するため、同17日出發、門司港にて乗船した。會員井本、飯、坂上、渡木、富谷の諸氏ならびに、藤瀬、吉田の諸氏も日蝕のため同船したので、船中大變賑やかであつた。20日基隆着。臺北の吉村、服部兩氏に迎えられ、先づ臺北に行つて、諸種の打ち合はせをし、又、JFAK より放送（録音）し、同日18時、觀測地たる富貴角燈臺に到着した。先着者既に多數あつた。直ちに觀測地點選定。同夜は諸方からの來集者約30名と懇親座談會を開いた。

愈々21日、早朝起床。一同張り切つて觀測準備に忙殺された。正午に近づく頃、來集者益々増加し、之れに放送局及び各新聞關係者を加へて、總勢約80名——空は朝少々曇り、其の後漸次晴れ上る。風は東風約6米。12時10分、初虧を首尾よく觀測。しかるに、其の後、東風に送られて積亂雲の來往繁く、漸く觀測の希望淡らぎ、一同悲觀。遂に濃雲に妨げられたまゝ13時41分に皆既は始まつたが、蝕甚の前後から3~4回雲が淡らぎ、立派なコロナを見ることが出來た。寫眞を撮つた人もあるが、此等の成績は少々怪しいと思ふ。さて生光は確實に觀測し、ダイヤモンド・リングは立派だつた。其の後、雲は依然として去らず、15時7分の復圓は結局見えなかつた。

自分は、(1)時刻の觀測、(2)コロナ外形と黃道光の撮影、(3)皆既の經過の活動寫眞による撮影をプログラムに組んでゐたが、(1)は半ば成功、(2)は駄目、(3)は可なり成功した。——他の人々も大體同様。但し、眼視觀測者は可なり立派な收穫を得た模様である。自分は生光直後に現地放送をした。

觀測終了後、直ちに器械を片付けて、一同相前後して臺北に引き上げ、翌22日、市の公會堂で、臺北支部主催の座談會があり、22時過ぎまで多數來會者が歡を盡した。——それから、23日基隆から乗船、26日早朝田上に歸つた。

今回の觀測については、臺北支部の吉村昌久氏始め會員各位の絶大なる斡旋奔走により、實に豫期以上の成功を獲たことに關し、滿腔の謝意を表する次第である。

(1941—9—28. 田上天文臺にて、山本一清)